View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kobe Shoin Women's University Repository KARASHI-DANE

Kobe Shoin Women's University Repository
KARASHI-DANE

橋下徹大阪府知事記者会見記録の探索的分析

著者	松田 謙次郎
著者別名	MATSUDA Kenjiro
雑誌名	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス
巻	13
ページ	15-22
発行年	2010-03-21
URL	http://doi.org/10.14946/00001493

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

橋下徹大阪府知事記者会見記録の探索的分析*

松田謙次郎

An Exploratory Study of Press Conference Transcripts of Tôru Hashimoto, Governor of Osaka Prefecture

MATSUDA Kenjiro

Abstract

The press conference transcripts of Tôru Hashimoto, Governor of Osaka Prefecture, were analyzed with respect to the person names, names of the political parties and first person pronouns that are used in his speech. The person names were found to be categorized into two groups, those that are mentioned only for a short period and those that are more or less constantly mentioned through his two years' tenure. The Governor also shows an interesting change in the frequencies with which he refers to the LDP (Jimintô), the Komeitô and the DPJ (Minshutô). While there was scarcely any difference as to the number of times that the Governor mentioned each party in the early days of his tenure, the change of power in August 2009 brought about a drastic increase of the word DPJ in his speech. Furthermore, the Governor also attaches *-san*, a Japanese honorific suffix for a person's name, more often to the DPJ than the other two parties. As to the first person pronoun, it was found that he pushed his preference for *boku* (a casual first person pronoun for males) to *watashi*/*watakushi* (a formal counterpart) further in his second year, making the latter form all but extinct in his press conference speeches. Lastly, several interesting topics for further study were also suggested.

橋下大阪府知事の就任以来 2 年間にわたる定例記者会見記録を用いて、そこで言及される人名、政党名、そして自称詞について分析を行った。人名につ

---

*本稿は、春日芳晃氏（朝日新聞大阪本社政治グループ）から府知事記者会見の分析を依頼されたことがきっかけとなり執筆されたものである。春日氏の分析も交えた記事は、朝日新聞（大阪本社発行）2010 年 2 月 6 日付朝刊 34 面に掲載された。本稿は、そこでは含めなかった分析も含めた報告となっている。なお、春日氏の分析・知見による部分には、その都度注釈を付してある。また、樋口耕一氏には、KH Coder の掲示板を通して御教示を賜った。さらに平島晶子さんは、原稿について貴重なコメントをして下さった。皆さんに深く感謝を申し上げたい。ただし本稿の最終責任はすべて松田に帰することを明記しておく。この研究の一部は、平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)(課題番号 21320084)「焦点・スコープ現象の統語・意味論的分析と音声実験・コーパス調査による検証」（代表者 西垣内泰介）を受けてなされたものである。

Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin 13, 15–22, 2010.
© *Kobe Shoin Institute for Linguistic Sciences.*

talks_13.indd 19 10.4.6 4:09:06 PM

いては一時期頻繁に言及されるものと、長期にわたりほぼ安定して言及されるものがあり、それらが言及時期によりいくつかのパターンをなしていることがわかった。政党名では、就任当初は自民・公明・民主の 3 党でほとんど差がなかったものが、2009 年 8 月の政権交代以降民主党の言及数が自民・公明を圧倒している。さらに政党名に「さん」付けをする割合を検討すると、やはり民主党に対する「さん」付けが大幅に増加していることがわかった。自称詞を分析すると、もともと高かった「僕」の割合が 2 年目にはさらに増えて、「私」がほとんど使われない状態になっていることが判明した。最後に今後有望そうなトピックを 3 点指摘した。

1. はじめに

橋下徹大阪府知事はこの 2 月で就任後 2 年目を迎えた。府知事は就任以来定例の記者会見の模様を府庁サイト (http://www.pref.osaka.jp/koho/kaiken/index.html) で公開しており、それらは動画とテキストで閲覧が可能である。テキスト部分は全部で 77 件であり、関連部分だけに整形しても 3MB ほどの大きさがある。橋本氏の発話特徴を分析するにも手頃なサイズと言えるだろう。そこで、これらのテキストを分析することで、就任以来の 2 年間から見える橋下知事発言の特徴を探索的に明らかにすることとした。以下はその報告である。

2. データ・方法論

データは、2008 年 2 月 6 日から 2010 年 1 月 27 日までに開催された 76 回の記者会見テキスト部分で、これらはすべて大阪府庁サイトで動画と共に公開されている。[1]

まず各記者会見からテキスト部分のみをコピーし、そこから内容見出しや「知事」「記者」などの発言者表示、「このページの先頭へ↑」といったサイトのタグなどを取り除いたテキストファイルを作成した。クリーニング作業はテキストエディタ「秀丸」の置換機能を用いてほぼ自動で行い、一部を手作業によって補完している。

今回の分析は、「橋下知事の記者会見データから何か面白い現象を発見する」という、探索的色彩の強いものである。そのため、分析ツールとして樋口耕一氏が作成された KH Coder を採用した。[2] KH Coder はテキストマイニング用のフリーウェアであるが、データベースサーバの MySQL、形態素解析ツールの茶筌、そして統計解析ソフトの R と連携して、テキストデータからの単語切り出し、各種基礎統計値の計算、検索、KWIC 分析、対応分析、クラスター分析等までこなす、非常に優れたソフトである。

KH Coder を使用するだけであればテキスト側で特別な準備は不必要であるが、KH Coder では HTML マーキングを利用して分析に活用することができる。この機能を利用して、半年ごとに「<H1>08 年 02 月～08 年 07 月</H1>」という形式でマーキングを施

[1]全記者会見のうち、2009 年 5 月 17 日と 23 日の 2 回についてはインフルエンザの流行に伴う臨時記者会見であったため、動画のみが公開されている。そこでこの 2 回についてはデータに含めなかった。また、2010 年 2 月 3 日のデータは新聞記事のデータでは含めてあるが、本論文では一部で除外した場合もある。

[2]KH Coder のさらに詳しい機能紹介やダウンロードについては http://khc.sourceforge.net/ に詳細がある。また樋口 (2004) も非常に参考になる。

した。こうすることで、発言期間を分析に簡単に組み入れることができるわけである。このマーキングは、「知事発言には何らかの形で時間的変動が認められるはずである」という仮説に基づいている。

なお、このHTMLマーキングでは階層構造も可能なため、たとえば記者会見ごとに日付を入れ、さらに知事の発表部分と質疑応答部分の区別と言ったマーキングも可能であったが、今回は採用していない。

3. 分析I：人名

最初の分析として、知事発言に登場する人名を取り上げることとした。人名を取り上げる理由は、発言で言及する人名から知事がその折々に重視している問題が浮かび上がり、またある程度人脈についても推定が可能であろうと考えられるからである。そうであれば、半年ごとの期間分析では言及される人名にも変動が見られることだろう。

ここでは、知事の言及する人名変化のパターンを見るために、対応分析を行った。対応分析は、名目変数を扱う多変量解析の一つで、変数の反応パターンにより固体を分類するのに用いられる手法である。今回のようなケースでは、まさにもってこいのツールである。[3] それぞれの軸でどれほどデータを説明できたかの指標になる寄与率を見ると、1・2軸合計で81%とほぼ十分と思われる数字なので、1軸と2軸を掛け合わせた散布図を作成した（図1）。対応分析ではデータ全体を通して出現頻度数の高い項目は原点付近に布置され、出現パターンの近い項目同士は互いに近くに布置される。

図1の分布を各人名の半年ごとの分布と照らし合わせて検討してみよう。以下、6ヶ月ごとの期間を、それぞれ第1期（2008年2月～7月）、2期（2008年8月～2009年1月）、3期（2009年2月～7月）、4期（2009年8月～2010年1月）と呼ぶことにする。グラフの4象限には、右上の第1象限が第4期に、左上第2象限が第2期、左下第3象限が第2・3期、そして右下第4象限が第3期に集中して出現した人名が並んでいる。どうやら第1軸は第2期に集中していたか否かで、第2軸は第3期に言及が集中したか否かでデータを分けているようである。

原点付近では嘉田（滋賀県知事）、中田（前横浜市長）、石原（東京都知事）、平松（大阪市長）、井戸（兵庫県知事）、関（前大阪市長）らの名前が見え、知事や市長が目立つ。これらの人名は、多かれ少なかれコンスタントに言及されていたものと解釈される。

グラフで緊密なクラスターを形成する人名群に目を転じると、まず教育委員会問題を巡り言及された人名（小河（勝）、陰山（英男）、藤原（和博））を始めとして、建築家の安藤忠雄や仁坂（和歌山県知事）などの一連の名前がグラフ左側にクラスターを形成している。第2期に集中したこれらの人名は他からやや隔絶した位置にある。

グラフ右下のクラスターでは、人名は金子（一義）、中川（秀直）、舛添（要一）、古賀（誠）と国政レベルの政治家名が並ぶ。地方分権、ダム、関空、インフルエンザなどとの関連でこうした人名が言及されたことが発言データからは確認できる。なお位置は少々

[3] ここで行った対応分析では、最小出現数を10件に設定してある。よって生起頻度が10件未満の人名はこの布置図には登場しない。また、ここの分析では2010年2月3日の会見のデータは含まれていない。

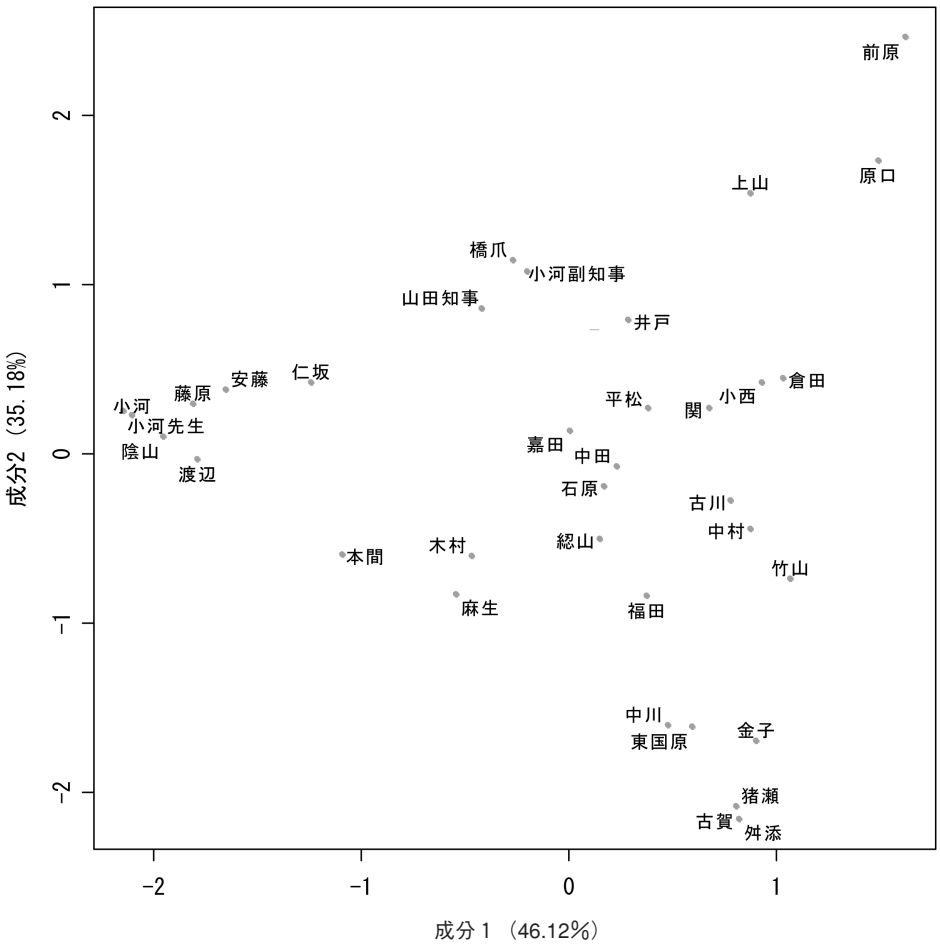

図 1: 人名の対応分析結果（1 軸と 2 軸のみ）

離れるが、福田元総理の名前も見え、東国原（宮崎県知事）もこのクラスターに登場する。これらの人名は、ほぼ第 3 期に集中して登場しているものである。

右上隅に目を転じると、上山（府特別顧問）のほか、原口（一博）、前原（誠司）らの民主党政治家の名前が見られる。最近の第 4 期に出現する人名は、政権交代後に知事の言及する人名も民主党にシフトし始めていることを裏付けていると言えるであろう。

まとめると、橋下知事はその時期によって言及する人名を大きく変化させている。一時期にしばしば言及された人名も、政治的イシュー自体の変化や政治情勢の変化と共にまったく言及されなくなることがわかる。橋下知事は、就任前にはタレントとは言え一介の弁護士であった。その彼が言及する人名の変遷は、就任後時間とともに知事職に慣れて行き、やがて中央の政治にまで言及する政治家へと変貌を遂げて行く過程を反映しているとも言えるだろう。

4. 分析 II：政党名と「さん」付け

橋下知事は会見中に自民党、民主党と言った政党名を口にするが、政党名の言及数は就任期間中にどのように変化しているであろうか。上で見た人名の変化と同様であれば、政権交代の起きた 2009 年 8 月を境に知事の言及する政党名にも変化が見られるはずである。知事はまた、政党名に「自民党さん」のように「さん」を付けることがあるようである。この「さん」付けは言及政党名の変動と絡むものだろうか。

これらの点をまとめたのが表 1 である。表 1 では、月ごとに各党名言及数の合計[4] とそのうちの「さん」付けの回数を示し、併せて 1 年目と 2 年目の合計と「さん」付けの割合を計算してある。数字を見て行くと、最初の 1 年は 3 党ともほぼ言及数合計、「さん」付け共に差がないと言ってよい。2008 年 9 月に各党とも言及数が増えたのは、この頃衆議院選が近いという観測があったせいであろう。民主党が伸び出すのは 2 年目の 4 月頃からで、そこから上下を繰り返しながら差が開き出し、政権交代の 2009 年 9 月には自民＝ 17 件、民主＝ 70 件、公明＝ 15 件と大差を付けるに至っている。その後もこの傾向は変わらず、12 月には自民・公明共に言及数がゼロという極端な状況になっている。

「さん」付けの変化はどうだろう。各党共通して 1 年目よりは 2 年目に「さん」付けが多くなっているが、1 年目には最も「さん」付けが少なかった民主党が、2 年目の終わりには他 2 党を大きく引き離しトップに来ている。橋下知事の党名言及法はこの 2 年で変わったが、その変化は政権交代を挟んだ党勢の変化を反映しているようである。

[4] この部分では、2010 年 2 月 3 日のデータを含めてある。また「さん」付けの認定に当たっては、以下の基準に従った：

- 「自民党、公明党さん」はどちらにも付いていると見なす。
- 「自民党の皆さん」は付いていないと見なす（あくまで党名に付くかが問題なのであり、党員が問題なのではない。また「自民、民主、公明の皆さん」という場合、党を指すのか党員を指すのかが曖昧である）。
- 「民主党政権さん」は「さん」付けとはしない（党ではなく政権を指しているので）。

表 1: 月ごとの自民・民主・公明各党の言及数と「さん」付け頻度

	自民合計	さん	民主合計	さん	公明合計	さん
2008 年 2 月	0	0	0	0	0	0
2008 年 3 月	0	0	2	1	0	0
2008 年 4 月	6	0	4	0	6	0
2008 年 5 月	2	1	2	1	2	1
2008 年 6 月	4	2	0	0	1	1
2008 年 7 月	0	0	0	0	1	0
2008 年 8 月	6	3	1	0	1	0
2008 年 9 月	12	4	16	4	10	5
2008 年 10 月	1	0	1	0	1	0
2008 年 11 月	2	0	1	0	2	0
2008 年 12 月	0	0	1	1	0	0
2009 年 1 月	3	3	0	0	2	1
1 年目合計	36	13	28	7	26	8
さん%	36		25		31	
2009 年 2 月	4	1	3	0	4	1
2009 年 3 月	0	0	0	0	0	0
2009 年 4 月	5	5	21	12	4	4
2009 年 5 月	11	0	11	5	12	0
2009 年 6 月	13	8	28	21	9	6
2009 年 7 月	15	7	14	6	6	4
2009 年 8 月	3	2	8	5	4	3
2009 年 9 月	17	10	70	47	15	9
2009 年 10 月	0	0	6	2	0	0
2009 年 11 月	4	1	44	33	1	1
2009 年 12 月	0	0	23	21	0	0
2010 年 1 月	1	1	7	3	4	2
2010 年 2 月	2	0	4	3	0	0
2 年目合計	75	35	239	158	59	30
さん%	47		66		51	

5. 分析 III：自称詞

最後に橋下知事の自称詞を検討してみよう。知事は就任以前の弁護士時代にタレントとして活躍していた頃から、すでに「僕」を多用していたが、その一方で時に「私」も使用しているようである。これら 2 形式はどのように使い分けられているのであろうか。上で見てきた政党名や人名のように、この 2 年間でこれら 2 つの自称詞の使用率に変化は見られるであろうか。[5]

表 2 は、橋下知事の「僕」と「私」の使用度数と割合を、就任 1 年目と 2 年目に分けて集計したものである（2 年目には 2010 年 2 月 3 日の記者会見も含めてある）。[6]

表 2: 「僕」と「私」の前半・後半各 1 年間における使用頻度と割合

	僕	%	私	%	合計
2008 年 2 月～2009 年 1 月	2,255	88.4	295	11.6	2,550
2009 年 2 月～2010 年 2 月	3,474	99.3	24	0.7	3,498
合計	5,729	94.7	319	5.3	6,048

X^2 (1) = 349.59 p <0.0001

やはりそもそも知事の発言では「僕」が圧倒的多数を占めていたが、それでも 1 年目には「私」は 11%は使われていたわけである。それが 2 年目になると、0.7%にまで激減し、知事が用いる自称詞はほとんど「僕」になってしまっている。つまり、知事の「僕」～「私」の使い分けの一つの要因として時期が関わっており、自称詞も言及する人名や政党名と同様にこの 2 年間で変化を遂げていたことになる。

知事の自称詞の使い分けは、もちろん時間だけですべてを説明しうるものではない。「「私」は会見の冒頭、府職員作成の文書を見ながら述べる場合がほとんど。記者との質疑応答では「僕」に切り替わる。知事周辺によると、弁護士時代も法律相談や法廷では「私」だが、普段は一貫して「僕」だった」（「朝日新聞」2010 年 2 月 6 日朝刊 34 面）[7]とすると、当然スタイルの関与が考えられる。麻生前総理の場合もスタイル差は自称詞切り替えの要因であった (松田, 2009)。マスコミに登場することの多い橋下知事であれば、場面差によるスタイルシフトの研究に必要なデータも揃うはずである。さらに今後の分析を待つこととしたい。

[5]ここでは橋下氏の使用する自称詞を 2 つに限定しているが、厳密には知事はこの他にも記者会見中に「俺」や「我々」も使用している。ただし、(1)「俺」は引用中の使用に限定されており、その使用頻度も 31 件と無視しうるレベルであり、(2)「我々」は厳密には 1 人称複数で「僕」や「私」と同列に扱うことはできず、またこれも今回のデータ中の生起頻度が 39 件ときわめて低い、という理由からこれら 2 形については今回は扱わないことにした。

[6]言うまでもなく「私」には「わたし」と「わたくし」の両形が混在しており、知事がこの 2 形を使い分けている可能性も否定できない。これを解明するには動画を使った分析が必要だが、今回は見送らざるを得なかった。今後の課題としたい。

[7]ここの部分は、知事を追ってきた記者としての春日氏の知見によるものである。

6. おわりに

本稿では橋下知事の記者会見データを元にして 3 つの分析を試みた。それぞれの分析には足らぬ部分も多く、きわめて概略的なものにとどまっている。今後の分析対象として面白そうな点をいくつか挙げて、本稿の結びとしよう。

ひとつは、記者会見内の構成との関わりである。自称詞の所でも触れたように、知事自身の発表なのか記者との質疑応答なのかによって橋下氏がスタイルをシフトさせているようである。これは自称詞ばかりでなく、さまざまな言語変異現象に影響するものと考えられるので、まずこの点を解明する必要がある。

次に、文法・談話レベルの変異の解明である。今回は人名、政党名とその「さん」付け、そして自称詞とすべて単語レベルのトピックに限定してある。しかしながら、言語変異はもちろん単語レベルにとどまるものではない。十分な量のテキストデータであれば、現象によっては文法や談話レベルのバリエーションも分析可能である。次の機会には是非とも取り組みたい。

最後に動画資料の活用が挙げられる。大阪府庁のように、知事会見をテキストデータばかりでなく動画でも公開しているサイトは言語研究者にとっては非常にありがたい。これによって音声情報もある程度は得ることができ、さらに身振りなどのパラ言語情報もわかるからである。今後の分析では、この貴重なデータの宝庫からさらに興味深い知見が得られることを期待しておく。

参考文献

樋口耕一 (2004). 『計量テキスト分析の方法と実践』. Ph.D. thesis, 大阪大学大学院人間科学研究科.

松田謙次郎 (2009). 麻生太郎の自称詞バリエーション：単独話者における一人称の変異. 『現代を読み解くメソドロジー』, 『メディアとことば』, 4 巻, pp. 2–32. 東京：ひつじ書房.

Author's E-mail Address: kenjiro@shoin.ac.jp
Author's web site: http://sils.shoin.ac.jp/~kenjiro/